

令和3年度学校自己評価システムシート（東京農業大学第三高等学校・同附属中学校）

目指す学校像	1. 主体性を重視する教育活動を展開する。 2. 部活動等の強化により、学校に活力を与える。 3. 生活指導を徹底していく中で、地域社会・国際社会から信頼される人材を育成する。 4. 私学としての特性を生かし、学校改革を進める。 5. 志願者を増加させ、定員の確保をめざす。 6. 財政の健全化を目指すなかで、生徒への教育サービスを向上させる。
--------	---

重点目標	1. 外部研修・生徒による授業評価・研究授業を通して、授業力の向上を図っていく。 2. 学年・教科・コース・クラブ活動・学校行事等の連携を強め、すべての教育活動で主体性を重視していく。 3. 特色ある教育内容の構築と発信。 4. 志願者を増加させ、定員の確保を目指す。
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学校評価委員会構成 出席者 学校関係者評価委員 4名 外部評価委員 8名 事務局(教職員) 1名
学校評価委員会は感染症防止のため学校評価委員10名へのアンケート形式で実施。

学校自己評価						学校関係者評価			
年度目標			年度評価(令和4年3月31日現在)			達成度	理由・意見		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策		
1	生徒の学力と進学実績の向上のために、教員の教科指導力・進路指導力・生徒指導力を向上させることを目指す。 生徒による授業評価、教職員の内外の研修会への積極的な参加、研究授業や授業参観およびFDの外部評価の実施と研鑽と情報の共有化と検証を行う。	①教科指導力の向上 ②進路指導力の向上 ③生活指導力・学級経営力の向上	①生徒による授業評価と外部機関の分析会の開催。内外の研修会参加と教職員間での情報共有。研究授業計画的実施と教科会議での検証・授業内容や定期テスト・講習への工夫・改善。教職員へのFDの実施。 ②進路意識の向上・入試に関する研修の積極的な参加と学年・教科・コースによる情報交換。 ③スクールライフ手帳の記入と記載状況の確認、二者面談の実施。	①授業改善への取り組み・研修会への参加と報告内容・授業見学・参観数・FD評価者による評価と各自の研鑽 ②進学実績の年度別累計比較と指導内容別の振り返り ③基本的生活習慣全般の評価	①模擬試験結果は上昇傾向にあり、そこから判断すると、授業改善は進展しつつある。しかし大学入学共通テストの全国平均点との差異では大幅な向上は見いだせていない。 ②国公立大学合格者数が昨年の21名から34名に増加した。 ③生徒への指導を組織的に取り組み、一人一人の実情を共通認識し、保護者生徒の満足度を高める工夫をした。特に高校3年生の進路決定率は96.2%で過去最高数値を示した。	B A A	①教科において、生徒による授業アンケート結果を分析・検証し、教員間での情報共有と学校としての数値目標を設定する。新教育課程を踏まえ3年間を見据えた授業展開の計画を立て実行する。計画の目的を生徒と情報共有することで、授業に臨む意義や姿勢を構築していく。 ②iPad・プロジェクター付電子黒板を有効活用し、生徒が達成感を味わえるような授業展開、課題の準備、主体的な学習を身に付けさせる授業を展開する。 ③生活リズムの改善と家庭学習の定着の徹底を図る。自習室座席数を増設し、その活用とスタディプラスにより自己学習の習慣を身につける。	B A A	概ね達成しているが、因果関係の分析、具体的な数値目標を示す必要がある。 進学実績の数値目標に近づいている。 年度目標は達成している。
2	I・II・III・中高一貫の各コースの現状認識と改善点を列挙し、さらなる教育目標の到達や教育内容の充実を再検討する。 学年主体の横軸の教育活動に加えて、コースが3年間(中高一貫コースの場合は6年間)を見据えた縦軸の教育活動を展開していくことで、生徒一人一人の希望進路実現に寄与していく。	①新教育課程の検討 ②生徒にかかわる様々な部署での連携を強めた学校行事・特別活動の実施。 ③生徒会活動・クラブ活動の活性化	①新教育課程に対応した授業計画の作成 ②主体的な学びの姿勢を構築するための企画・行事の実施。 ③部活動・生徒会活動の自主的活動を支援する	①新教育課程に基づく教育内容実現の検証・評価 ②目標の設定とその実現方法の検証・評価 ③部活動・生徒会活動支援についての検証・評価	①新教育課程は完成した。その効率的運用を目指して各教科単位での検討と準備は終了した。観点別評価の基準も設定し、教員間の情報共有を図った。探究の授業についても研修を重ね準備は終了した。 ②教科・分掌間での連携強化を図り、コロナ禍を踏まえた教育活動を可能な範囲で実施した。生徒自らの創意と工夫により文化祭・体育祭等は実施できた。 ③高校部活動は延べ9クラブが関東大会・全国大会出場を果たし、大きな成果を上げた。	A B A	①新教育課程実施後の振り返りとそれにより生じた課題の共有・解決に向けての検証を行う。探究学習・GIGAスクール構想の取り組みについての振り返りとそれにより生じた課題の共有・解決に向けての検証を行う。 ②コロナ禍での、教科・分掌を超えた連携強化の方策・実施方法の模索と準備、生徒への働きかけ等、さらなる充実を図る。 ③学校行事・部活動等で創意と工夫の大切さを生徒に理解させ、生徒の主体性・協調性・創造力を涵養する。	A B A	新教育課程の完成、主学習時間の定着は概ね実現できている。 生徒一人一人の将来を見据えた進路意識の向上を支援している。 生徒の主体性を重んじる教育活動は着実に進展している。
3	様々な体験・実験・観察を通じて学びの本質を追究する「実学教育」重視し実践している。中学では、東京農業大学食品加工技術センター・日本養殖振興会・トモノカイ等の支援を受ける。高校では、教科単位での校外学習(フィールドラーニング)を展開する。	実験・体験・観察を重視した科学的・学問的探究の精神・態度の育成を図る。	①「総合的な学習の時間」の一環としての屋上菜園でのダイズ栽培と醸造体験(味噌作り)、養殖体験等を実施(中学)。 ②博物館研修における調べ学習とプレゼンテーションの実施(中学)。 ③フィールドラーニングの実施(高校)。	①～③ともコロナ禍により当初の予定を縮小した形で実施。また実施できない場合は代替行事としてオンラインを活用したキャリア教育講演会・外国人留学生との交流会を実施。	①～③とも計画通りの実施には至らなかったが、実施状況・内容を検討・修正しながら実施した。	B	①～③とも、コロナ禍に対応した経験を踏まえての実践が必要である。生徒の知的好奇心・探究心を涵養し、主体的な学習姿勢の確立に結びつけていくには、民間企業・民間資本の発想を真摯に受け止め、「実学教育」と「知識の定着を図る学習」、「主体的な学びへの姿勢」をいかに融合させていくかの工夫と指導力が必要である。	B	体験型の校内学習・校外実習は積極的に行われ、年度目標は達成している。
4	中学・高校とも志願者を増加させ、入学定員の確保を図る。	①高校志願者数の増加と定員確保 ②中学志願者数の増加と定員確保	①地域社会のニーズに即した教育改革の実行 ②広報活動の見直し ③説明会方法の見直し	①教育改革の具体策を講じて、その発信。 ②チラシ配布数と方法、公共交通機関やweb上での広報活動の実施 ③回次ごとにテーマを変えた説明会の開催	左記の具体的方策はいずれも実行したが、高校・中学とも定員確保には至らなかった。高校については志願者数が大幅減少した。中学入試は、経年的な課題である低倍率の入試からは脱却できなかった。	C	本校が地域社会から期待されている点を再検証し、教育内容・部活動等魅力ある改善策を講じていく必要がある。特に中学高校とも生徒募集が厳しい状況である。安定感のある生徒募集が展開できるよう策を巡らしていく。中高とも説明会の内容・実施時期と回数を大規模に見直し、ホームページのリニューアル等、教育内容の発信方法を改善する。	C	本校へのニーズの分析、マーケティング調査、SNSによる発信力の強化等が喫緊の課題である。